魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

ＴＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

【Ｎコード】

Ｎ０１３１ＢＡ

【作者名】

ＴＥ

【あらすじ】

これはとある転生した青年の物語。原作にどのように影響するか・・・・・・・

プロローグ『えっ？転生？』by？？？

ここは……どこだ？

俺はどうしてここにいる？

あたり一面は白い空間で何もない

ん？

そもそも、『俺』は誰なんだ？

「あなたは『中村潤一』という人間です」

ああ……。確かにそんな名前だった気がする

それで、俺の名前を知っている羽の付いたあなたは誰なんだ？

「羽がある時点で誰かわかりませんか？」

うーん……。ハーピィ？

「なんでそこでモンスターの名前が……」

冗談だよ。天使か神様か……いや、女神様なのかな

「ええ。私は裁判の女神『サリエル』ともうします」

それでそのサリエル様が俺に何かよう？つか、女神様ってことはこ

こは天国か？

「いいえ。ここは下界と天国の狭間です。あなたはここにいる理由はわかります？」

そりゃあ死んだからだろ？

「では、その理由は？」

それは……えーっと、思い出せない。それに思い出そうとすると頭が痛くなる

「それはあなたの心が拒絶しているからです。ですからあなたはさっき自分の名前を思い出せなかった。自分の体が具現化されていないと同じように……」

俺の心が拒絶している？それに具現化って……？

あっ、俺の体がない

「あなたの今の状態は白い塊。魂だけの状態です。目を閉じて、リラックスして、自分の体を思い出してください」

リラックス……自分の体を……

あっ、なんだが暖かさを感じる……

「それがあなたの体です。どうですか？死んだ理由を思い出せましたか？」

いや、そこだけが思い出せない。もやもやと霞がかったような……

「そうですか……でしたら」

……どうして急に抱きしめる？

「今からあなたが死んだ光景をあなたに見せます。わかってもどうか気を確かに保って下さい」

ぐっ、いきなり何かの光景が頭に！？

「落ち着いて。気を確かに」

……

「どうですか？思い出せましたか？」

俺は……身投げしたのか……

「はい。あなたは仕事や人間関係のストレスから耐えきれずに……」

……なんで思い出させたんだ

「必要なのです」

何にだよ！？

人の嫌な記憶を思い出させて……一体なにに必要なんだよ！

「あなたがこれから『転生』をするために必要なのです」

『転生』！？
なんで？
「あなたがまた生まれて生きるために必要だからです」
どういうことだ？
「生き物は生死を繰り返します。また生まれたとき、前世と同じ過ちを繰り返さないように天国で学ぶのです」
だったら俺もそうすればいいじゃねえか
「ええ。でも、あなたはこれで１００回目の身投げ……自殺をしているのです」
はい？
「あなたの前世、そのまた前世、さらにその前世。計１００人の前世のあなたが自殺しているのです」
ま、まじで？
「はい。あなたはこれまで天国で何を学んでいたのだろうかと呆れてしまうくらいに異常です。ですから特例としてあなたは『転生』という形で学んでもらおうと思います」
学ぶって一体なにを？
「生きることの素晴らしさと人と人の絆をです」

は、はあ……

「さっそくですが、転生する場所は『魔法少女リリカルなのは』の世界です」

えっ！まさかのアニメ世界に転生！？

「はい。そういうのを学ぶにはアニメが一番かと思いまして。あなたはこの作品を知っていますか？」

まあ、大まかな話ぐらいしか……

「それでは転生しようと思いますが、何か希望はありますか？できる限りの希望は叶えましょう」

んじゃ、原作キャラに絶対に会わないようにしてくれ

「それでは転生する意味がないのでダメです」

ちっ……。なら、原作の記憶を全部消してくれ

「理由は？」

深い理由はないけど、原作を知ってたんじゃ本当の生きることの素晴らしさや絆ってもんがわからねえと思うんだ

俺もいちいち同じことを繰り返すのは嫌だし、前世の記憶がなくてもね

「わかりました。その希望は叶えましょう。他にありますか？」

いや、特には…………

「そうなのですか？『チートな力をくれ』とか『イケメンにしてくれ』とかそういう希望はないのですか？」

おいおい。それこそ学ぶことの意味がねえじゃんかよ

「それもそうですが、知り合いの神はそういう人が多いと話してましたが」

知るか。俺は俺だ。他人のことは興味ないし関係ない

「わかりました。それでは転生をしましょう。…………ってどうして急に身構えているのです？」

いや、その転生の仕方はどうせ下から穴が空いて落ちるってパターンなんだろ？

「うふふ。それは他の神がしていることであって私はそんなことはしませんよ。あそこにある扉を開けて進んでください」

なんだ。良かった。俺、高所恐怖症だから落ちるあの感覚が大嫌いだからな

「まあ、私もそのオチを一度でも良いからやってみたいと思っていました」

えっ…………？地面がないい！！！？？

「頑張って下さいね！！」

こうして、訳も分からず青年の転生物語が始まる
青年はそこで目的のものを得ることができるのか……

第一話『女神に前世の記憶も消しといてと頼んでおくべきだった』ｂｙ潤一

こんにちは。俺の名前は『上條潤一』。前回、転生することになってしまった悲しい男さ
なんか知らんが名字だけ変わって名前は同じなのは女神の計らいなのだろうか

まあ、どうでもいいか
ちなみに年齢は五才。幼稚園児だ

それなりに生きてきたが前世となんら変わらない

両親は共働きで家にいないし、一人っ子だし、友達もいない

まあ、ぶっちゃけ友達など作る気になれない。理由は俺が前世の記憶を持ってしまっているからだ

俺の前世の年齢は２４歳。いい大人だ
そんな大人が、しかも無愛想で無口で口下手で有名だった俺が幼稚園児と仲良くなれる訳もなく、ずっと一人だった

両親はそんな俺にあまり関与してこなかった。仕事が生きがいのような人たちだ。大人しい子供だと思ってるんだろう

前世の記憶がなければまた何か違うんだろうが……

まあ、今更気にしても仕方ないんだが、そんな俺もひとつの趣味がある

それは今、この手に持っているサッカーボールがそうだ
俺は前世では唯一サッカーが大好きで暇さえあればサッカー観戦をしていた
もちろん、やってもいたが才能がなく、努力もしていなかったからろくに上達もせず、高校で引退した
せめて今回はと思い、始めたのだ。このボールも両親に初めてお願いして買ってもらった
そのボールで練習しようと近くの公園に来たのだが
「……」
一人、ブランコに乗って俯いている女の子がいた。年齢は俺と同じくらいだな
なんかたびたび見えるその顔は悲しそうな表情だ
「まあ、いいか……」
正直どうでもいいし、話しかけたところで俺が慰めることなどできる訳がない
だったら、練習していた方がいいに決まっている
「よっ、ほっ！」
ぐっ、やっぱりリフティングは難しいな。でもまあ、前世では１０回できるかできないかくらいだったのが、今では６０回近くできるようになっているのだから練習はやっぱり必要だよな、うん

「おっと」

リフティングを失敗してしまった。こんなことなら女神にサッカーの才能をくれとか言っておくべきだったか

「……」

「……」

ボールを追いかけるとその先にはブランコに乗っている女の子の目の前にあった

「……」

「……」

俺は無言のままボールを拾うと元の位置へと戻る

そりゃあ、取ってくれって話すこともできたが、面倒だから止めた

そのまま一時間くらい練習して、俺は家に帰った。あの女の子はその少し前くらいには居なかった。家に帰ったのだろう

まあ、どうでもいいか

一週間が経ち同じ時間。俺はまた公園で練習していた
これが俺の日課みたいなものだから良いとしてまたあの女の子がいた
最初は気にしていなかったが一週間も一人ブランコでいれば、誰でも気になるだろう
しかも、見られているような気がするし……。気のせいか
話しかけてみるか？いやでもな……
「あっ……」
しまった。考えごとをしていたせいでリフティングを失敗してしまった
「はい……」
「えっ？」
ボールを取りに行こうとしたらブランコに乗っていた女の子。略してブラ子が俺のボールを持って俺に渡してくる
「……」
「あっ、ちょっ……」
ボールを渡すなりブラ子はさっさと、逃げるように公園から居なくなってしまった。せめてお礼の一言でもと思ったのだが……

まあ、いいか

今日の練習でリフティングが６０から８０までできるようになった

えっ？全然変わってねえだって？

うるせえいやい

第二話『なんつーか、仲良くなるのはほんの些細なきっかけなんだな』ｂｙ潤一

前回の練習からまたさらに一週間
また、俺はリフティングの練習をしていた
えっ？どうしていつもリフティングの練習なのかって？友達が居ないからだ

言ってて悲しくなるからその話は置いといて今日は、ブラ子が来ていない
いつもはしばらくしたらブランコに乗りにくるんだが……

まあ、いいか
俺には関係ない

「おっと……」

どうも考えながらのリフティングができないみたいだ

「……」

「あっ……」

俺の目の前にはブランコに乗った女の子。略してブラ子がいた
そのブラ子の手には俺のボールを持っていた

「はい、どうぞ……」

「あ、うん……」

俺はブラ子からボールを受け取る。受け取ったのを確認するとブラ子はいつもの定位置（ブランコ）へと移動した

「……」

うん。わかってる。俺は今言わなければならない言葉がある
それはたった一言。誰でも知っている言葉だ

「はぁ……」

俺は深いため息を吐いた後、練習を再開した。俺って本当に情けないヤツだ

「まあ、いいか……」

俺はリフティングしながらそう呟くのだった

あれから数日が経って俺はいつも通り練習のため公園に来たのだが
俺は入口で止まっている

「うっ……ぐすっ……」

ブラ子が泣いていた。何で泣いてんだろうか？
どうする、今日は帰るか？
いやいや、別にブラ子が泣いていようがいまいが俺にはまったく関係ない事じゃないか
そう！関係ない！
だから俺は練習する！

「……」

「っ……！」

俺が公園に来たのに気づいたのか涙を両手で必死に拭っている。どうやら俺には泣いているところを見られたくないようだ

「……」

「……」

いつも通り、俺は練習、ブラ子は見学。そう。それはいつも通りなのだが、あんなブラ子の様子を見て集中できる訳もなかった

「はあ……たくっ……」

俺は不自然にならないようにボールをブラ子の方へと蹴った

「！　……♪」

ブラ子がボールを拾うと嬉しそうな表情でこちらに向かってくる。
まるで犬みたいだ

「は、はい。どうぞ……」

「……」

俺が無言で受け取ると、またブランコへと逆戻り

「……」

「♪」

もう一回やってみたら嬉しそうにボールを拾いこちらに向かってくる。あいつは犬か？

「……」

「♪」

ボールをまたブラ子に向かって蹴る。ブラ子が持ってくる

「……」

「♪」

また蹴る。ブラ子が持ってくる

「……」

「♪」

「……」

「♪」

「……」

「♪」

蹴れば持ってくる。蹴れば持ってくる。それの繰り返し

ちょっと楽しくなっている俺がいる。って、遊んでどうすんだよ、俺

「……」

「？」

ボールを受けとらない俺を見て首を傾げるブラ子。可愛いなちくしょうめ

とりあえず、ボールを受け取ると地面に落としまたブラ子に向かって蹴る

「♪」

ブラ子は俺に持ってくるためにボールを拾おうとするがそうは問屋が卸さない

「ちょっと待てぃ！！」

「！？」

ビクッと反応するブラ子は泣きそうな顔してしまっている

「知っているか？サッカーではＧＫ以外が手を使ったら『ハンドリング』という反則になるんだぞ」

「ふえっ？」

「つまり渡す（パスする）ときは足でやれ」

「・・・・・・・・・・・・・」

ブラ子は恐る恐るボールを地面に置く。そしてゆっくりと足を振りかぶりボールを蹴った

「うしっ！ほら」

「ふえっ？」

俺はボールをブラ子に渡す。そんな行動に驚いた表情をするブラ子

まあ、こんな事をするのは初めてだから仕方なくはあるんだが

「ほらパスだパス」

「う、うん！」

「ナイスパス」

「あ、ありがとう・・・・・・」

俺とブラ子は、日が落ちるまでパス交換を続けた

「もう時間だな」

「うん……」

「おいおい。何でそんな顔すんだよ。また明日もあるんだからさ」

「えっ……？」

「んだよ？文句あるか？」

「な、ないよ！でも……迷惑じゃない？」

「全然。むしろ今日みたいにパスしてくれたら助かる」

「……」

ちょっと恥ずかしいのか下を向いてしまうブラ子。まあ、嘘は言ってないし

「それじゃあ、また明日な」

「う、うん！！また、明日！！」

ブラ子は元気良く挨拶してから帰っていった。まあ、最初より元気になったみたいで結果オーライだな

明日もブラ子が手伝ってくれるし一石二鳥……ん？

「そういえばあの子の名前なんて言ったっけ？」

名前をすっかり聞き忘れてた

「まあ、いいか」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0131ba/

魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

2012年1月2日09時47分発行